仏神宗

仏神寺柳山神社

地鎮祭の儀

高皇産靈大御神

天之御中主大御神

神皇産靈大御神

瓊瓊杵尊

天照大御神

柳山大山祇大山神

不動明王

大日如来

遍照金剛

天之御中主大御神様いつも奇跡のカで私に恵みを頂き誠にありがとうございます。

目　次

主祭神仏宝号

第一節　地鎮祭の儀　勤行・・・一
清祓式開場祝辞祝詞（きよはらいしきかいじょうしゅくじのりと）・・・二
修祓の儀（しゅばつのぎ）・・・二
開始始祈念（かいしきねん）・・・三
降神の儀（こうしんのぎ）・・・四
三神降神の儀（さんしんこうしんのぎ）・・・六
大元造化三神報恩之祝詞『現代語訳』・・・七
大元造化三神報恩之祝詞（だいげんぞうかさんじんほうおんののりと）・・・七
産土神祓祝詞（うぶすなのかみのはらいのりと）・・・九
天津祝詞（あまつのりと）・・・十一
祓祝詞（はらえのりと）・・・十二
祓祝詞（はらへのりと）・・・十三
地鎮祭招神祝詞（じちんさいしょうじんのりと）・・・十五
地鎮祭祝辞祝詞（じちんさいしゅくじのりと）・・・十五
大祓祝詞（おおはらいのりと）（６月３０日・１２月３１日）・・・十六
（ホツマ伝え）天津祓（あまつはらえ）・・・二十一
天津祓（あまつはらえ）・・・二十二
天津祓（あまつはらえ）・・・二十三
国津祓（くにつばらい）・・・二十三
蒼草祓（ひとあおぐさのはらい）・・・二十三
かたかむな　第一首～第一三首　第八十首・・・二十四
発菩提心真言・・・三十五
三摩耶戒真言・・・三十五
光明真言・・・三十六
仏説摩訶般若波羅蜜多心経・・・三十七
延命十句観音経・・・四十
不動明王大咒・・・四十二
密厳院発露懺悔文・・・四十三
三力の偈・・・四十六
回向文・・・四十六
終祈念（きねん）・・・四十七
神前に捧げる御饌の種類・・・四十八

仏神宗仏神寺柳山神社由来・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・四十九
著作権侵害について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・五十二
出版社出版日・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・五十三

第一節　地鎮祭の儀　勤行

清祓式開場祝辞祝詞（きよはらいしきかいじょうしゅくじのりと）

かけまくも　かしこき　はらひどの　おおかみと　たたえことを　へまつる
せおりつひめの　かみ　はや　あきつひめの　かみ　いぶきどぬしの　かみ
はや　さすらひめの　かみ　よはしらを　はじめ　まつりて
あまつ　かみ　やおよろず　くにの　かみ　やおよろず　これの　はらひ　わざを
たいらけく　やすらけく　きこしめせと　かしこみ　かしこみも　まをす。

修祓の儀（しゅばつのぎ）

祓い串で、関係者を祓い、会場全体を祓う。

▲記号が表示されていたら、光明真言を三遍復唱する事

かいしきねん

開始祈念

※別紙　記載あり

先ずは神様をお呼びする。

降神の儀（こうしんのぎ）

二拝　九拍手

※二拝九柏手（祈念）一拝は、最高神、天之御中主大御神様に捧げる最も良い数である、九は最高の数であるがゆえに、最高神を呼ぶのに最も良い数、九回の柏手打つ。
本当の御名前は、ミナカヌシ様ですが、アメノ、アマノは、総称です。
アメノミナカヌシオオミカミ、アマノミナカヌシオオミカミと呼ばれているが、どちらも正解の呼称であります。
アマノミナカヌシオオミカミと唱えても、ミナカヌシと唱えても効果あり。

あまのみなかぬしおおみかみ
あまのみなかぬしおおみかみ
あまのみなかぬしおおみかみ

とゆっくり三回唱え、

みなかぬし
みなかぬし
みなかぬし

とゆっくり三回唱えて、唱えた後に、

○オー と、一息でゆっくり唱える。○オー と、一息でゆっくり唱える。○オー と、一息でゆっくり唱える。

一拝

三神降神の儀（さんしんこうしんのぎ）

二拝　二拍手

うぶすなのおおおみかみ

うじがみさま

みずがみさま

とゆっくり三回唱え、唱えた後に、

○オー と、一息でゆっくり唱える。○オー と、一息でゆっくり唱える。○オー と、一息でゆっくり唱える。

一拝

大元造化三神報恩之祝詞『現代語訳』（だいげんぞうかさんじんほうおんののりと「げんだいごやく」）

言葉に掛けて、申し上げるのも、恐れ多い、天地根源の神様で在らせられる、天之御中主の大御神、高皇産霊の大御神、神皇産霊の大御神達の、不思議で絶妙な、御恩恵によって、この世に生まれ出てきた、我々の、身の上ならば、その御恩恵に、報い奉ろうとして、御称え、申し上げますには、いよいよ高く、底知れぬ、天上界の、幽界を、主宰され、始めもなく、終わりもなく、盤石に、永遠に、御鎮まりになられて、目には見えない、根源のエネルギーは、百種類に近い、神のエネルギーを、生じ給い、目に見えるものは、昼の世界、夜の世界を、主宰され、またこの地球にあっては、現代を、生きる人を始め、呼吸をする生き物も、呼吸をしない物も、この世に、ありとあらゆるものの限りを、生み出し給い、支配され、御守り下さり、幸をお与え下さる、ご功績の、偉大で、悠久で、広くて、厚い、大きな愛情を、蒙って、この現世に、生きている限りは、大御神様達の、元となる、御心そのままに、この真心を尽くさせて、頂いて、怠慢にならず、尊敬し、畏怖の気持ちで、お仕えする様子を、御心も穏やかに、お聞き下さいまして、全世界の人々を、天地の神理に違わせず、開けた世の中に、後れることなく、さまざまな災難が無く、つつがなく、存在させて下さり、夜も、昼も、昼夜分けず、御守り、御恵み下さり、幸をお授け下さい、と、大空を、遥かに、拝ませて、頂きます、と、申し上げます。

大元造化三神報恩之祝詞（だいげんぞうかさんじんほうおんののりと）

※この祝詞は神前でも唱え、無形の空を仰ぎ奏上する祝詞です。

かけまくも　いとも　かしこき　あめつちの　もとつかみ
あまのみなかぬしの　おおみかみ　たかみむすびの　おおみかみ
かむみむすびの　おおみかみたちの　くすしく　たえなる
みたまの　ふゆによりて　この　うつしよに　あれいでたる　みにし　あれば
そのもとつ　みめぐみに　むくい　たてまつらむとして
ただへごとを　へまつらくは　いやたかく　そこひなき
たかまのはらの　かくりょを　しめ　たまひ
はじめもなく　おわりもなく　ときはに　かきはに　しづまり　まし　まして
めにみえぬ　もとつけは　ももたらず　やその　かみけを　なし　たまひ

めにみゆるものは　ひのみくに　つきのみくに　ほしのみくに
またこれの　おおつちに　ありては
うつしき　あおびとくさを　はじめ　いきあるも　いきなきも　よにありとし
あるものの　かぎりを　うむしいで　うしはき　まもり　さきはえ　たまえる
みいさおの　おおき　ひさしき　ひろき　あつき　おおむ　いつくしみを
かがふりて　このうつしよに　あらむ　かぎりは
おおみかみたちの　もとつ　みこころの　まに　まにに
この　こころを　つくして　うむことなく
この　みを　つとめて　おこたる　ことなく
うやまひ　かしこみも　つかえまつる　さまを　たひらけく　やすらけく
きこしめして　よよのくにの　あおびとぐさをして
あめつちの　かみわざに　たがは　しめず　ひらけ　よにおくれ　しめず
くさぐさの　わざわいなく　つつがなく　あらしめ　たまえ
よのまもり　ひのまもりに　まもり　めぐみ　さきはえ　たまえと
みそら　はるかに　おろがみ　まつらくと　もおす。

産土神祓祝詞（うぶすなのかみのはらいのりと）

かけまくも　いとも　かしこき　あめつちの　もとつかみ
あまのみなかぬし　の　おおみかみ　　たかみむすび　の　おおみかみ
かむみむすび　の　おおみかみ
かけまくも　かしこき　あまてらす　おおみかみ　　うぶすなの　おおかみ
ちんじゅの　おおかみを　はじめ
いとも　ありがたき　わが　しゅごの　ごそんざい　たちの
おおまえを　おろがみ　まつりて　　かしこみ　かしこみも　まをさく
おおかみさま　ぶっそん　たちの
たかき　とうとき　こうみょうを　いつも　いただき
ひろき　あつき　みたまのふゆと　ごぶっとくを
うみの　この　いや　つぎつぎに　たまわり　めぐみ　たまひ
われは　てんち　しぜんの　どおりに　したがい　おかげさまの　こころを　もちて
われの　じんせいを　たいせつに　して　　われと　かぞくを　ねぎらい
はげまし　かんしゃして　こころに　えいようを　あたえ
なりわいに　はげみ　てんしょくに　ならしめ　たまひ
わが　いちれい　しこんと　こころが　いや　ますますに

せいちょうし ようじょうし こころがけ みすこやかに
よろづの　ねがうこと　かなえ　たまひ
うぶすなの　しんぶつは　ゆうけん　ちょうわの　しんぶつにて
うつし よを　さりぬ　のちは　たかき　れいかいに　はいら しめ　たまひ
じょうどへと　みちびき　たまひ
うつし よも　かくりょも　たのしみ　よろびの　かわる こと なく
みこころも　なごやかに　きこしめして　まもり　めぐみ さきはへ　たまひ
いへかど たかく　いやたかに　いやひろに　さかえしめ　たまふ ことを
いんよう ちょうわ　された　うつくしき　だい しぜんの ちきゅう じんるいの
へいわ　はってんの　ために　つくさしめ　たまひ
もろもろの　まがごと　つみ　けがれを
はらひ　たまひ　きよめ　たまふと　もおす　ことの　よしを
あまつかみ　くにつかみ　やおよろづの　かみたたちと　ともに
きこしめせと　かしこみ　かしこみも　まをす

天津祝詞（あまつのりと）

たかまのはらに　かむづまります
かむろぎ　かむろみの　みこと　もちて
すめみ　おやかむ　いざなぎの　みこと
つくしの　ひむかの　たちばなの　おどの
あわぎはらに　みそぎ　はらひ　たまふ　ときに
あれませる　はらへどの　にじゅうろくしんの　おおかみたち
もろもろの　まがごと　つみ　けがれを
はらひ　たまひ　きよめ　たまふと　もおす　ことの　よしを
あまつかみ　くにつかみ　やおよろずの　かみたちと　ともに
あまの　ふちごまの　みみ　ふりたてて
きこしめせと　かしこみ　かしこみ　もおす。

※神前に立ち、祝詞を奏上する時、先ず二拝し、次の祓祝詞と神棚拝詞祝詞を奏上する。

祓祝詞（はらへのりと）

かけまくも　かしこき　いざなぎの　おおかみ
つくしの　ひむかの　たちばなの　おどの
あわぎはらに　みそぎ　はらひ　たまひし　ときに
なりませる　はらへどの　にじゅうろくしんの　おおかみたち
もろもろの　まがごと　つみけがれ　あらむをば
はらひ　たまひ　きよめ　たまふと　まをす　ことを
きこしめせと　かしこみ　かしこみも　もおす

※神前に立ち、祝詞を奏上する時、先ず二拝し、次の祓祝詞と神棚拝詞祝詞を奏上する。

祓祝詞（はらえのりと）

かけまくも　かしこき　いざなぎの　おおかみ
つくしの　ひむかの　たちばなの　おどの
あわぎはらに　みそぎ　はらひ　たまふ　ときに　なりませる

※山吹色文字は、読まない、※黒文字だけ読むこと。

※衣服を脱いだ時に成った神々

※杖 つきたつ　ふなとの　かみ
※帯 みちの　なが　ちはの　かみ
※袋 とき　おかしの　かみ
※衣 わつら　ひの　うしの　かみ
※袴 ちまたの　かみ
※冠 あき　ぐひの　うしの　かみ
※左腕輪 おき　ざかるの　かみ
※左腕輪 おくつ　なぎさ　びこの　かみ
※左腕輪 おきつ　かひ　べらの　かみ
※右腕輪 へざ　かるの　かみ
※右腕輪 へつ　なぎさ　びこの　かみ
※右腕輪 へつ　かひ　べらの　かみ

※潮流の中流で清めた時に、黄泉の国の穢れから成った神々

やそ　まが　つひの　かみ
おお　まが　つひの　かみ

※その禍を直すために成った神々

かむな おひの かみ　おおな おひの かみ　いづの めの かみ

※潮流の底で清めた時に、成った神々（上記三神＝綿津見三神　下記三神＝住吉三神）

そこつ わたつみの かみ　そこつ つのおの かみ

※潮流の中程で清めた時に、成った神々

なかつ わたつみの かみ　なかつ つのおの みこと

※潮流の表面で清めた時に、成った神々

うわつ わたつみの かみ　うわつ つのおの みこと

※最後に顔を洗った時に成った神々（三柱のうずのみこ＝三貴子）※黙読する事。

※左目 あま てらす おおみかみ　※右目 つく よみの みこと

※鼻 たけはや すさの おの みこと

はらえど よ はしらの かみたちと ともに もろもろの まがこと

つみ けがれを はらひ たまひ きよめ たまふと もうす ことを

きこしめせと かしこみ かしこみも もおす

地鎮祭招神祝詞（じちんさいしょうじんのりと）

かけまくも　かしこき　おおとこぬしの　かみ
「このさとの　うぶすなど　しづまり　ますの　おおかみ」
これの　さにわに　おりましませと　かしこみ　かしこみも　もうす。

地鎮祭祝辞祝詞（じちんさいしゅくじのりと）

これのところを　うし　はき　ます　おおとこぬしの　かみ
「このさとの　うぶすなと　たたえまつる　かみの」
みまえに　かしこみ　かしこみも　もうさく　このところに
「住所　生年月日　氏名を言う」
の　いえ　つくる　として　いやしろの　みき　みけ　おき　まつりて
こひのみ　まうす　ことは　この　ふみならす　つちの　たいらかに　つきかたむる
いわねの　うごくこと　なく　おおかみたちの　あい　うづない　まして　このつくる
いえの　むなかど　ひろく　たかく　さかえし　めかがび
このかみの　あらび　たまう　ことなく　まもり　さきわえ　たまへと
かしこみ　かしこみも　もうす。